

自画像による大学生の適応性の検討

Investigation of Adjustment in Undergraduate using Self Portrait

山田 ゆかり 天野 寛*
Yukari YAMADA Hiroshi AMANO

近年、不登校、ひきこもり、校内暴力などの学校不適応を中心とする青年期の心理的適応問題の増加が指摘されている。大学生においてもこれは例外でなく、自己不確実感や不全感を抱え、友人ができない、うまくコミュニケーションがとれない、学内での居場所を見つけれないなど、大学生活への適応に大きな困難を抱える学生が増えてきている。大学としても、学生の心理的適応にこれまでにない配慮を必要とする局面となってきたのである。

こうした問題意識を背景として、大学生の適応性に目を向け、自画像を用いて自己意識のあり方と適応性の関連性について検討することを意図した。本稿ではまず、大学生の自画像について分類を行い、描画に現れる特徴について検討した。

その結果、自画像は、全体的な印象、顔の表情、特異な表現や不自然な表現、詳細さ、描画全体のバランスなどから、不適応状態から何らかの行動化の可能性が指摘されるA群、抑うつ傾向が指摘されるD群、適応状態にあることが示唆されるN群、分類不能群の4群に分類された。また、A群、D群、N群別に、日常生活行動における適応性の1つの指標として学業成績との関連性を検討したところ、3群間で大きな差のあることが認められた。さらに、3群の自画像の描画には明らかに異なる特徴のあることが指摘され、自画像から適応性を査定することの妥当性が示唆された。

キーワード：自己意識、自画像、適応性

self consciousness, self portrait, adjustment

1. 問題

自己意識のあり方が、ひとの行動や適応性に深く関わっていることはいうまでもない。青年期は、自己意識の形成過程においてもっとも重要な時期であり、最大の転換期であるとされてきた。青年期の適応性についてなされた多くの研究が、この時期に現れる適応障害の主たる原因として、自己不確実感あるいは方向喪失感といった、自己同一性の探究過程で生起する諸問題の存在を指摘している。こうした点から、適応性を自己意識との関連性の見地から検討することには大いに意義があるといえる。

山田 (1994, 1995) は、青年期の自己意識の形成

および自己同一性の確立について、意欲減退傾向を中心とする適応性との関連性に重点をおいて、20答法における自己記述をもとに検討してきた。20答法では、「私は誰だろうか」という最小刺激価を有する教示に対する「私は…」という自由に記述された反応を通して、個人が意識している自己のあり方が検討され、これまでの一連の検討を通して、自己意識の査定法としての有効性が示されてきている。しかし、20答法のような言語的表現から少し視点を変えてみると、自画像という非言語的な表現のうちには、適応性とかかわる自己意識のあり方がどのように投影されるのだろうか。山田 (1996) はこうした問題意識から、大学生にお

*日本医療福祉専門学校 (名古屋文理短期大学 非常勤講師)

る自画像と意欲減退傾向との関連性について検討を行い、特に意欲減退傾向と自画像の表情に強い関連性があることを見出した。適応性の指標としての自画像の可能性が示されたのである。

ところで、描画による心理アセスメントは十分に確立された方法であり、バウムテスト、人物画、HTPなどは、今日、心理臨床場面でアセスメントを実施する際にもっとも使用頻度の高い心理テストとなっている(小川・田邊・伊藤 1997)。描画のもつ優れた自己像の投影性ととともに、幅広い被検者に適応できる方法であること、被検者への侵襲が比較的少なく、利便性が高いことなどが支持されているといつてよい。

さて近年、不登校、ひきこもり、校内暴力などの学校不適応を中心とする青年期の心理的適応の問題の増加が指摘されている。大学生においてもこれは例外でなく、これまで中学生・高校生を中心に見られたような病理現象が大学生にも拡大しているとも考えられる。自己不確実感や 不全感を抱え、友人ができない、教員ともうまくコミュニケーションがとれない、学内での居場所を見つけられないなど、大学生活への適応に大きな困難を抱える学生が増えてきている。こうした中で、「学生相談室」や「カウンセリング・ルーム」といった学生相談のための機関を置く大学が次第に増加しており、日本学生相談学会の調査(1998)によれば、1997年現在の設置率はほぼ76%となっている。その活動も、従来の個別の面接を中心としたものにとどまらず、対人関係を維持し友だちづくりをサポートして、不登校やひきこもりを防ぐための試みが行われるようになってきている。その内容は、小中学校の保健室のような治外法権的な「居場所」の提供、グループワーク、作業療法的なかわりから家庭訪問までさまざまである。大学としても、学生の心理的適応にこれまでになく配慮を必要とする局面となってきているのである。

こうした問題意識を背景として、本研究では、大学生の学生生活・学業への適応性について検討することを意図した。これまで自己意識と意欲減退傾向との関連性を中心に検討してきたことを基礎として、意欲減退傾向に限らず広く適応性ということ視野に入れて、大学生の自画像からみた自己意識のあり方との関連性を検討し、適応性のスクリーニングテストとしての自画像の可能性を探ろうとするものである。本稿ではまず、自画像にどのような描画の特徴が現れ、そこからどのようなことが読み取れるかについて検討した結果

を報告する。

2. 方法

1) 調査方法

自画像は、「あなたの自画像を描いてください。できるだけ全身を丁寧に描いて下さい。」という指示により、A4版白紙に鉛筆(2B)で描画を求めた。「自画像」の描画は、著者の担当する講義の時間内に、自己分析の実習の一環として実施した。描画のための時間には特に制限を設けなかったが、全員が30分以内に描画を終了した。

描画後に、講義のなかで描画による心理アセスメントについて一通りの解説を行い、一旦自画像を回収したのち、学生個人に対して描画の解釈コメントを加えてフィードバックを行った。

2) 調査対象

大学生114名。すべて、著者の担当科目の受講者(1年生主体で2年生若干名を含む)である。

3) 調査の実施時期

1999年12月および 2000年12月。

3. 結果と考察

1) 自画像の分類

まず、一般的な「人物画」の解釈を行う際の、形式分析、内容分析の方法(高橋 1974, 高橋・高橋 1992)を参考にして、著者2名の了解観察によって、自画像をおおまかに分類した。分類は、はじめに全体的な印象評価を行い、さらに、顔の表情の表現、特異な表現や不自然な表現の有無、適切な詳細さがあり描き込みがなされているか、描画全体のバランスがとれているか、描線の強さや滑らかさはどうか、などに注目して行われた。

その結果、自画像は次のような4群に分類された。

- ① A群: 描画の特徴から、敵意や攻撃性、緊張感、不快感、衝動性などの存在が示唆され、欲求阻止事態において何らかの行動化(acting out)の可能性が指摘される群
- ② D群: 描画の特徴から、意欲減退、無力感、自己不確実感、逃避傾向、エネルギー水準の低下などが示唆され、抑うつ(depression)的傾向が指摘される群
- ③ N群: ①, ②で認められるような描画の特徴は指摘されず、おおむね適応状態にあることが示唆される健常(normal)群

④ 分類不能群：何らかの心理的問題の存在が示唆されるが、問題の種類を特定できるほどの明確な特徴が認められず、①、②、③のいずれにも分類されない群

分類の結果、A群：46名（40.4%）、D群：21名（18.4%）、N群：21名（18.4%）、分類不能群：26名（22.8%）となった。自画像の描画特徴からみる限り、不適応からの行動化の可能性が示唆されるA群の比率がかなり高くなっているが、今回の調査対象者が大学1年生主体であり、未だ青年期（思春期）特有の不安定さや混乱を色濃く示しているためとも考えられる。

2) A群、D群、N群の日常生活行動における適応性

こうした分類の結果が日常生活行動における実際の適応性をどれほど反映しているのかを検討するため、適応性の1つの客観的資料として、学業成績との関連性を見てみることにした。表1は、A群、D群、N群の別に講義中に調査を実施した当該科目の最終成績評価（履修の経過を含む）の分布を示したものである。

表1の結果から、まずA群についてみると、成績良好または平均（成績評価B段階以上）の者が58.7%と過半数を占めている（ただし、成績評価Bのうち1名は他科目の成績が全般に不良で、行動化の傾向も認め

られる）。その一方で、成績不良（成績評価C段階およびD段階：不合格）の者が21.7%となっている。さらに、その後退学に至った者（2名）や、出席不足等により定期試験の受験資格を失ったり、次年度に再履修するものの成績不良であったりといった、さまざまな経過を示した者（6名）など、不適応状態からの行動化が見られる者が存在する。こうした経過を示した者は、D群とN群では皆無であり、A群の描画特徴から指摘される行動化の傾向が、実際の行動と結びついていることは興味深い結果である。この結果をみると、A群では、行動化の傾向が、可能性のまま描画特徴のレベルでとどまっておき現実の行動レベルでは適応を示している場合と、現実の行動レベルでも不適応傾向を示している群の2つに大別されるといってよい。

また、D群についてみると、A群と同様、成績良好または平均の者が52.4%と過半数を占めているが、成績不良の者の比率も33.3%と3群の中でもっとも多くなっている。また試験欠席者は3名であるが、これも他群と比較して相対的に多くなっており、自信喪失や意欲減退、逃避傾向などが反映されている。

これらに対してN群では、成績良好または平均が95.2%とほとんどを占めており、しかもAA段階の比率が高くなっている。講義によく適応し、学業成績の

表1 A群、D群、N群の成績分布(%)および経過

成績評価	A群	D群	N群
AA (90点～)	5 (10.9)	5 (23.8)	10 (47.6)
A (80～89点)	11 (23.9)	3 (14.3)	5 (23.8)
B (70～79点)	11 (23.9)	3 (14.3)	5 (23.8)
C (60～69点)	6 (13.0)	6 (28.6)	1 (4.8)
D (~59点)	4 (8.7)	1 (4.8)	— (—)
欠席	1 (2.2)	3 (14.3)	— (—)
欠→退学	1 (2.2)	— (—)	— (—)
C→退学	1 (2.2)	— (—)	— (—)
停止	2 (4.3)	— (—)	— (—)
停→欠	2 (4.3)	— (—)	— (—)
停→C	1 (2.2)	— (—)	— (—)
停→D→C	1 (2.2)	— (—)	— (—)
計	46 (100)	21 (100)	21 (100)

注) BのうちA群の1名は、他科目成績不良 (acting outあり)

欠席：試験欠席 欠→退学：試験欠席のち退学 C→退学：評価Cのち退学

停止：出席不足等で受験資格なし

停→欠：停止、再履修時試験欠席 停→C：停止、再履修時評価C

停→D→C：停止、再履修時評価D、再試験評価C

面でも良い結果を出していることが顕著に認められるのである。さらに、試験欠席や受験資格喪失なども全く認められない。描画特徴から示唆される適応性の高さが、ほぼそのまま現実の適応的な行動にあらわれているといつてよく、大学生活全般への適応性の高さを示唆する結果となっている。

このように、まず自画像の描画特徴だけをみて分類を行い、その上で成績との関連性を見てみると、両者の関連性は顕著である。今回の検討は、当該科目の成績との関連のみという条件づきではあるが、これほど顕著に関連性が認められたことは、自画像の描画特徴から適応性の診断を行うことについて大きな可能性が期待されるといえる。

3) 各群の自画像の描画特徴の分析

次に、各群の自画像の描画特徴について検討していく。なお、A群については、成績が良好または平均のグループ(AH群)と成績不良および行動化ありのグループ(AL群)に分けてみていくことにする。図1、2、3、4は各群から代表的な自画像それぞれ9点を選び示したものである。なお、各図は、原画のタッチを損ねないよう、忠実にトレースしたものである。

(1) AH群の自画像

はじめに、AH群について図1を見る。ここでは、まず、顔の表現にみられる特徴が指摘される。不安や緊張感、怒りや敵意をうかがわせる硬い表情(AH-2, 3, 4, 9)は彼らの生活感情の投影であろうし、表情の表現の省略(AH-1, 5, 7)はそれらを抑制しようとしているためと考えられる。また、頭部と身体部分のバランスの悪さ(AH-6, 8, 9)や衣服の特異な表現(AH-4, 8)も目立ち、情緒面での不安定さや社会適応への困難さが攻撃行動につながる可能性が示唆される。さらに、この群の自画像で特に目を惹くのは、AH-1, 5, 6であろう。AH-1にみられる適切な詳細さと具体性の欠如は、テスト事態に対する拒否的な傾向を示しているのかもしれない。AH-5での不安定な描線は、自我機能の低下を懸念させる。AH-6では、理性と衝動とを結ぶ部分の象徴である首と四肢や胴体との接続の不自然さ、足の指や耳に見られる特異な表現からみる限り、自我機能の低下やサイコティックな問題の存在さえ示唆されるが、現実の行動面では、講義への出席状況・成績とも極めて良好な事例である。描画からは病的な印象を受けても、現実には能力もあ

り適応的であるケースはままた見受けられるものであるが、いずれにしても、このような特異な自画像を描きながら、適応的な行動がとられているのはなぜか、両者の関連性についてさらに検討をすすめる必要がある。

(2) AL群の自画像

図2は、AL群の代表的な自画像である。AH群で指摘されたような、不安、緊張、敵意などを示す表情(AL-3, 4, 9)や頭部と身体部分のバランスの悪さ(AL-2, 7, 9)などはここでも目立つが、これらに加えて、どの描画にも不適応を示す表現が多くなされている。まず目立つのは、かれらが未成熟であったり、退行していることを示す特徴である(AL-1, 2, 6, 7)。また、手、足など重要部分の省略があり(AL-2, 4, 5, 9)、現実を無視しがちで自閉的な思考に陥りやすい傾向を示唆している。手の描写については、省略以外に、攻撃性を行動に表しがちであることを示す「鋭く尖った指先」(AL-1, 3)、自分自身の適応性や生産性に自信が持てないことを示す「曖昧に描かれた手」も目につく(AL-6, 7, 9)。このように、AL群とAH群は、どちらも同様に描画の特徴から、不適応状態からの行動化の傾向がうかがえるが、AL群ではAH群と比較して、現実的な問題を処理する基本的な能力の不足が指摘され、現実生活において、より不適応状態を行動化しやすいものと考えられる。

そこで、AL群のうち、現実の行動において顕著な行動化のある事例について個別にみていくことにする。AL-1は講義に欠席がちなまま当該科目の試験を欠席し、その後まもなく退学した事例である。描画の表現は全体に稚拙であり基礎的な能力の未成熟・退行をうかがわせるし、上寄りの位置からは自己不確実感を、塗りつぶされた頭髪や左右の腕の不均衡からは自分自身の考えに不安を抱き、現実適切に対処できないことが示唆される。AL-2は、出席不足で試験を受験できず、次年度再履修時に試験を欠席した事例である。画面の上方寄りに小さなサイズの描画が行われており、強い自己不確実感、自己評価の低下、不適応感の存在がうかがわれる。この描画からは、上述したように彼が未成熟・退行的な自我の状態にあり、自閉的な思考に陥りやすい傾向が指摘できるが、さらに他の部分に比較して目立つ鬚の表現からは、自らの未成熟性について葛藤していることも示唆される。AL-8は、受験資格停止後、再履修時の定期試験で不合格となり再

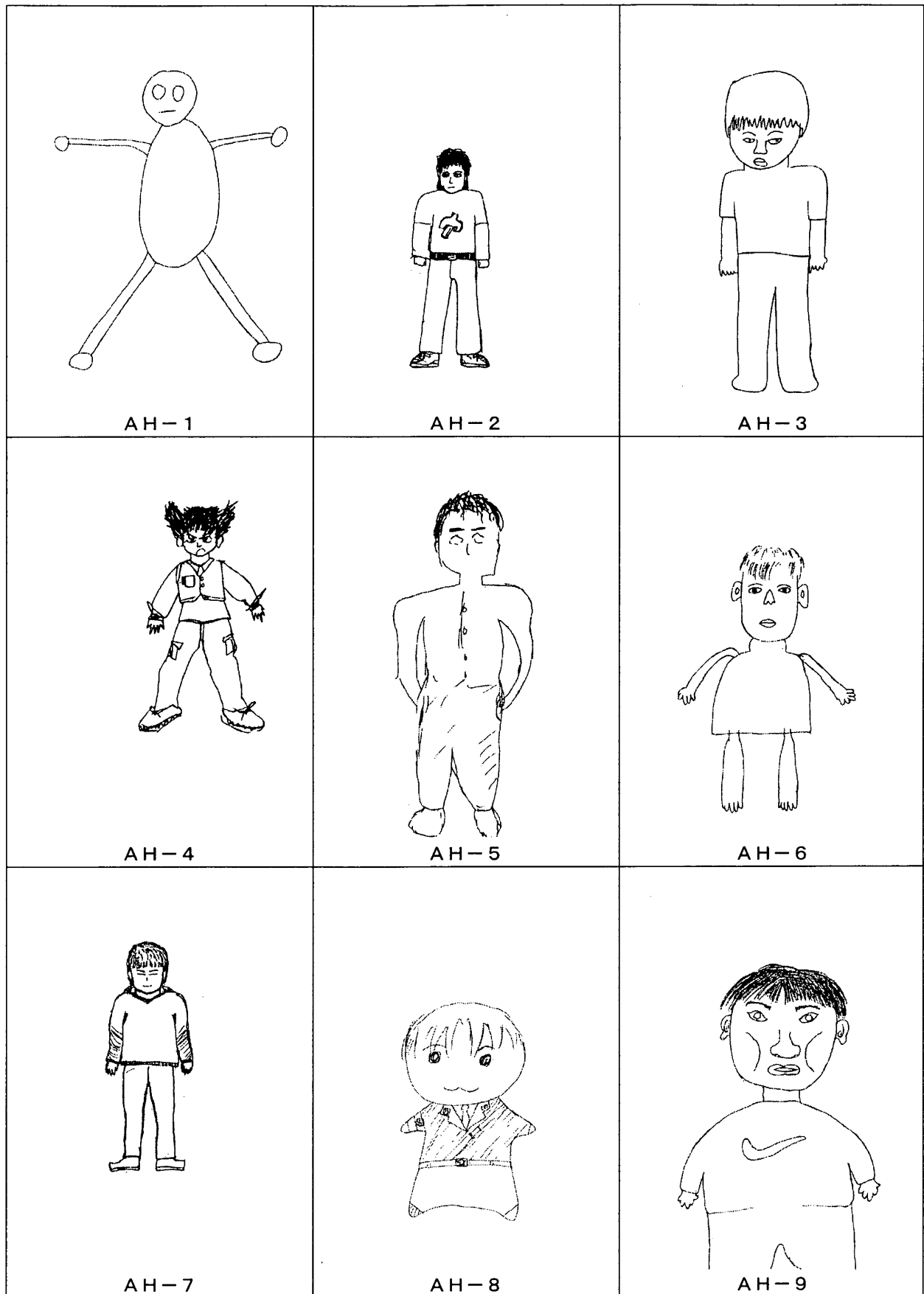


図1 AH群の自画像

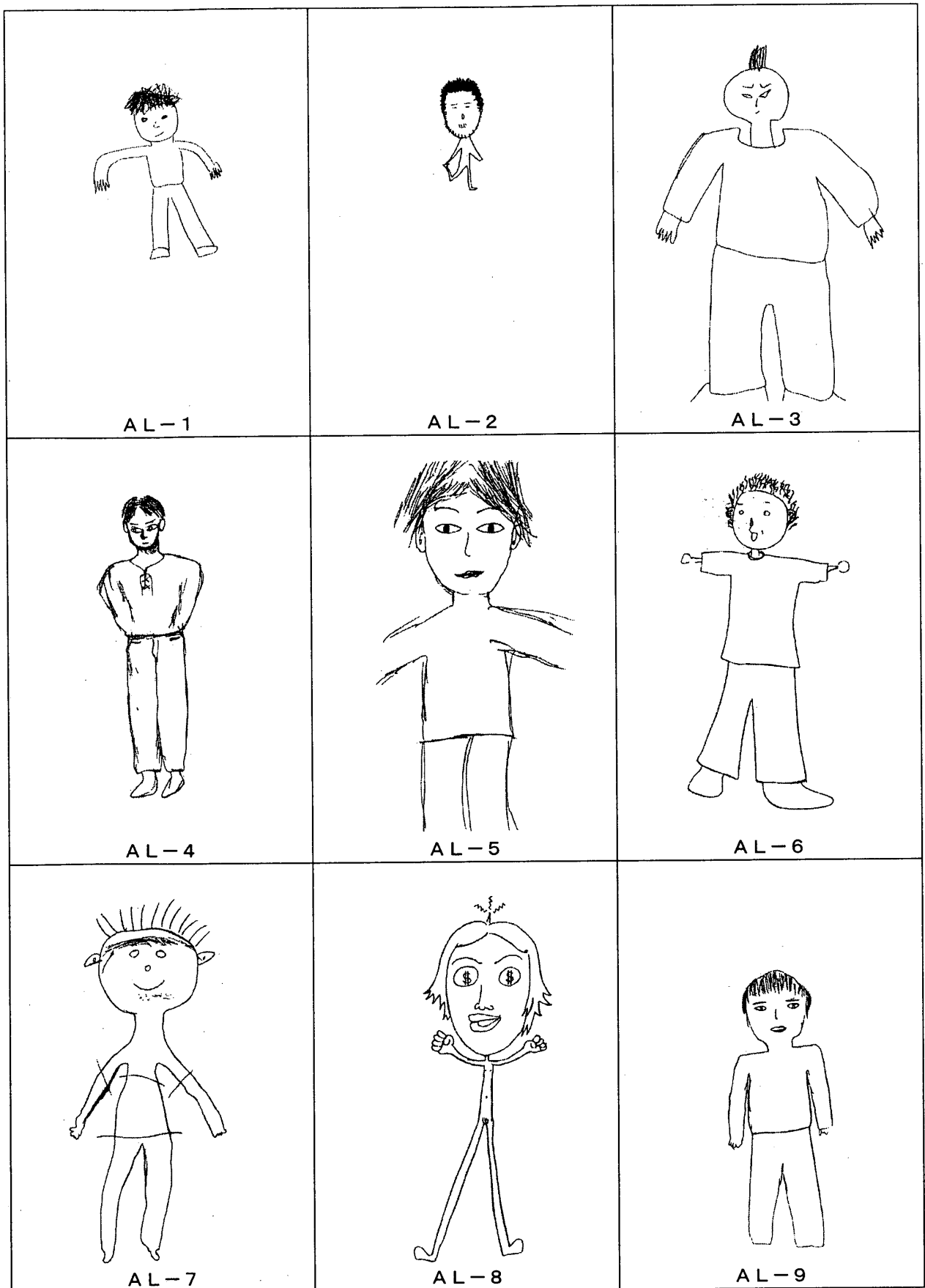


図2 AL群の自画像

試験を受験した事例であり、奇異な表現が目立つ。特に裸体は社会規範からの逸脱傾向を示し、水平より上に上がった腕は攻撃欲求を外界に向けがちで他者と円滑に接していくことの困難さを示している。なお、同様の腕の表現はAL-6にもみられる。さらに、AL-7は、当該科目の成績はB段階で講義への適応も悪くないが、科目によって適応状況に大きなムラがあり行動化もみられる事例である。全体的な印象は上述の3つの事例と同じく退行的であるが、特に、四肢や胴体を切断するような線の描写が目を惹き、心理的外傷体験が現在も何らかの影響を及ぼしていることが示されている。

(3) D群の自画像

つぎに、図3はD群の自画像であるが、このうちD-1からD-5までが当該科目の成績が良好または平均の者、D-6からD-9までが成績不良の者である。なお、D-6とD-7は試験を欠席し不合格となっている。ここでは、A群で認められたほどには、自画像の描画特徴と学業成績との関連性は認められない。この群では、衣服の単純な描写(D-2, 4, 5, 6, 8, 9)をはじめとして、全体的に描き込みが少なくやや詳細さを欠いているのが特徴であり、内向的で自己愛傾向が強く、外界とのかかわりに満足を見出せないこと、エネルギー水準が低下し引きこもりがちになることなどが示されている。また、眼鏡で眼が隠されている自画像(D-1, 4, 9)は、他の群には表れていないものである。不快な刺激を避けようと防衛的になっていたり、外界への猜疑心が強くなっていたりすることを示している。特にD-3は、一旦自画像を描きながらすべて抹消してしまい、結局眼鏡だけを描いた事例であるが、前記のような傾向が非常に強く、自己を開示することへの強い葛藤がうかがわれる。さらに、AL群でもみられた曖昧な手の描写も多く現れており(D-1, 2, 4, 5, 7)、自分の生産能力や社会適応性に自信がなく、逃避的になりやすい傾向も指摘される。

(4) N群の自画像

さらに、図4のN群の自画像をみると、上述のAH群、AL群、D群と比較して、明らかに適応的であることをうかがわせる描画特徴が認められる。衣服の描写に見られるように、適切な詳細さがあり、描き込みや推敲がおこなわれていることは、かれらが日常生活の実際的・具体的な面を十分に意識しながら行動し、現

実の課題に適切に対処していく能力を持っていると同時に、相対的にみて明確な自己像の把握がなされていることを示している。適切な詳細さは、顔の部分の描写にも現れており、表情を省略した自画像も認められない。やや硬い印象を与える表情の描写(N-1, 9)はあるものの、他の群にはみられない笑顔(N-3)や穏やかな表情(N-4, 5, 6, 7, 8)も現れている。また、描線も相対的に力強く補強も多用されており、自我の適切な発達、情緒の安定、自己統制などが示唆される。

4. 結語

以上、大学生の自画像について分類を行い、描画の特徴を検討してきた。検討結果を総括すると以下のようである。

(1) 自画像を、全体的な印象、顔の表情、特異な表現や不自然な表現、詳細さ、描画全体のバランス、描線の強さなどから分類した。その結果、自画像は、欲求阻止事態において何らかの行動化の可能性が指摘されるA群、抑うつ傾向が指摘されるD群、適応状態にあることが示唆されるN群、分類不能群の4群に分類された。

(2) A群、D群、N群の当該科目の成績と履修の経過から適応性を検討したところ、3群間で大きな差のあることが認められ、N群ではA群、D群と比較して、現実の行動においても適応的であることが認められた。またA群は、行動レベルでは適応性を示しているAH群と行動レベルでも不適応の傾向があるAL群の2つに大別された。

(3) AH群、AL群、D群、N群では、それぞれ特徴的な描画の傾向が認められた。

AH群：不安や緊張感、怒りや敵意をうかがわせる硬い表情や表情の表現の省略といった顔の表現にみられる特徴が現在の生活感情を投影している。また、頭部と身体部分のバランスの悪さや衣服の特異な表現が目立ち、情緒面での不安定さや社会適応への困難さが攻撃行動につながる可能性が示唆される。

AL群：AH群と同様の特徴に加えて、未成熟性や退行を示す特徴や、現実を無視しがちで自閉的な思考に陥りやすい傾向を示す特徴も認められる。

D群：この群では、描画にやや詳細さを欠いているのが特徴であり、内向的で自己愛傾向が強く、エネルギー水準が低下し引きこもりがちになることなどが示されている。また、不快な刺激を避けようと防衛的になっ

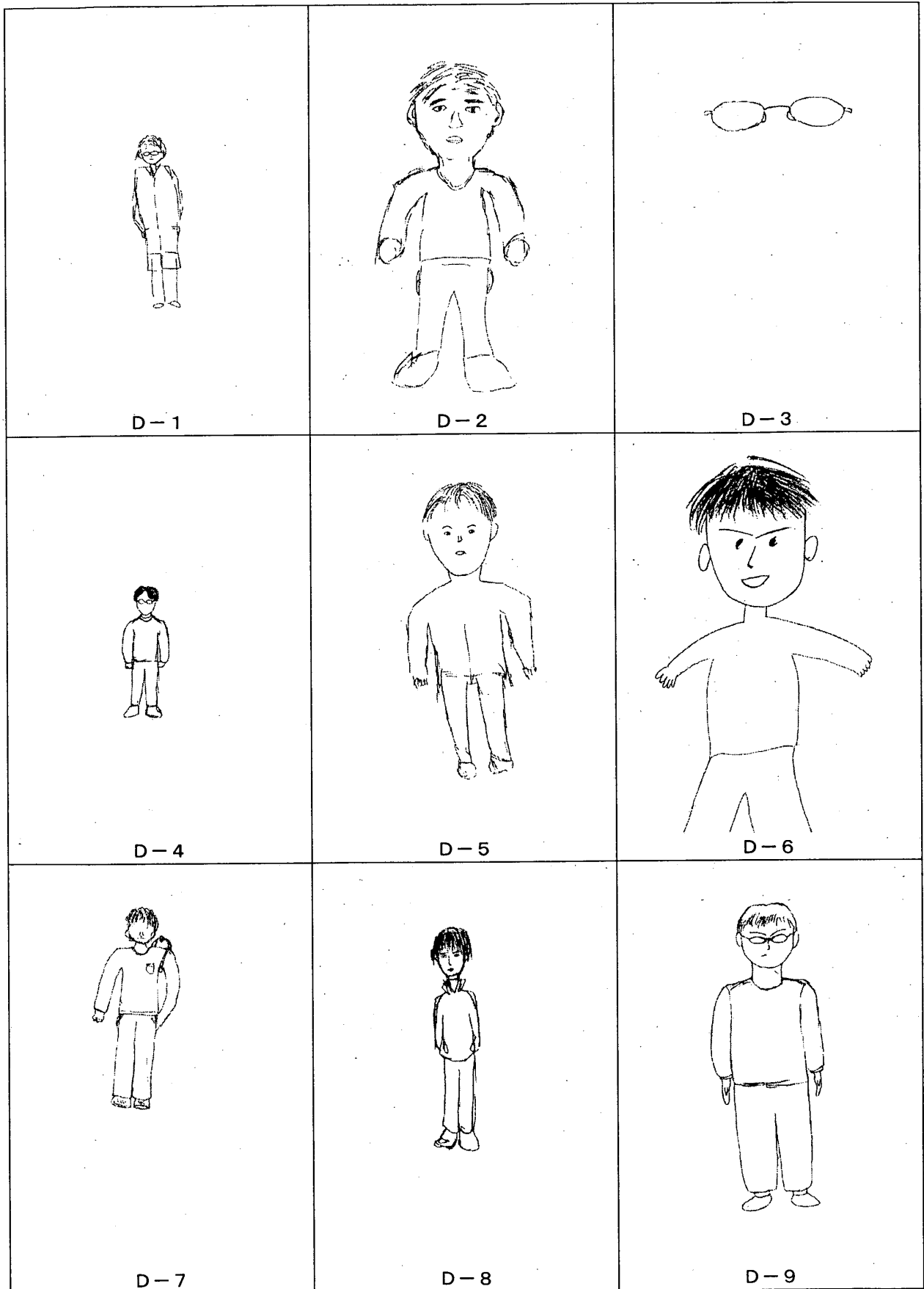


図3 D群の自画像



図4 N群の自画像

ていたり、外界への猜疑心が強くなっていたりすることが示唆される。

N群：明らかに適応的であることをうかがわせる描画特徴が認められる。適切な詳細さがあり推敲がおこなわれていることは、日常生活の実際的・具体的な面を十分に意識しながら行動し、自己を統制しながら現実の課題に適切に対処していく能力を持っていると同時に、相対的にみて明確な自己像の把握がなされていることを示している。

今後は、ストレス状態の把握とそれへの対処行動についてなど、適応性を査定するための客観的資料を収集し、それらと自画像の描画特徴との関連性についてさらに検討をすすめていく予定である。

文 献

- ・E.F.Hammer 松本真理子(抄訳) アクティング・アウトは描画にどう投影されるか 臨床描画研究「I」(1986)
- ・K.マコーバー 深田尚彦(訳) 人物画への性格投影 黎明書房 (1998)
- ・小林哲朗・高石恭子・杉原保史 大学生がカウンセリングを求めるとき ミネルヴァ書房 (2000)
- ・日本学生相談学会特別委員会 1997年度学生相談機関に関する調査報告 学生相談研究19巻1号(1998)
- ・小川俊樹・田邊肇・伊藤宗親 わが国における臨床心理検査の現状 日本心理臨床学会第16回大会発表論文集 (1997)
- ・高橋雅春 描画テスト入門 -HTPテスト- 文教書院 (1974)
- ・高橋雅春・高橋依子 人物画テスト 文教書院(1992)
- ・山田ゆかり 青年期における自己概念 一意欲減退傾向との関連性について(1)- 日本心理学会第58回大会発表論文集 (1994)
- ・山田ゆかり 青年期における自己概念 一意欲減退傾向との関連性について(2)- 日本心理学会第59回大会発表論文集 (1995)
- ・山田ゆかり 青年期における自己概念 一意欲減退傾向との関連性について(3)- 日本心理学会第60回大会発表論文集 (1996)